

ベートーヴェンは史上最も偉大な音楽家の一人であるが、当時の人々にとって彼の音楽は必ずしも耳心地の良いものではなかったようだ。ベートーヴェンが生きた時代、音楽は旋律やテンポなどの技術要素を駆使して様々な情緒を呼び起こし、聴衆を楽しませるためのものだった。その中であってベートーヴェンの音楽は新奇だが不可思議で難解、その旋律の流れがどのような感情の喚起を狙ったものであるのか分からず、聴く者は大いに戸惑ったという。だが、ベートーヴェンの死後ほどなくして彼の音楽は多くの人々に熱狂をもって受け入れられ

新ジャンルを創り出し、ワーグナーは“自分の最も内奥にある気分から命じられて”歌劇「さまよえるオランダ人」を書いたのだと語った。このように、音楽とセットでそれを理解するための「音楽外の情報」が積極的に喧伝されたことで、人々は単に音楽に身を委ねるだけでなく、音楽が表現しようとしているストーリーや作曲家の人生、情念に思いを巡らせ、自由に解釈する楽しみを知ることになった。そして、ベートーヴェンは晩年ほとんど耳が聞こえていなかったことや、“不滅の恋人”に深い愛情を抱いていたという伝記的事実が明らかになった

数 | 理 | の | 窓

『私は音楽を愛という以外の形では理解できない』
(リヒャルト・ワーグナー)



るようになった。この聴き手の感性の大転換をもたらしたのが、後に「ロマン派」と呼ばれる音楽家たちである。

リスト、ワーグナー、ショパンなどのロマン派の音楽家たちは若かりし頃ベートーヴェンの斬新な音楽に衝撃を受け、後に彼ら自身の手で独創的な楽曲を次々と世に生み出していくようになった。だが、楽曲以上に斬新だったのは彼らが行ったプロモーションだ。例えばエクトル・ベルリオーズが作曲した「幻想交響曲」は、彼が経験した失恋の絶望を表現した極めて主観的な作品であり、各楽章には本人の手による解説が用意され、演奏時にはこれを配布することが求められた。また、リストはヴィクトル・ユゴーやゲーテといった著名な詩人の詩や物語を楽器のみで表現せんとする「交響詩」という

のも丁度この頃である。不可解だった楽曲に激動の人生がリンクしたことで、人々は彼の音楽を「孤高の天才の内面世界に渦巻く情熱の表れ」だと理解し、その表現に驚嘆し心酔するようになっていった。

ロマン派の音楽家たちは、聴衆の音楽への向き合い方を根本的に変え、新しい音楽鑑賞の文化を生み出すことに成功した。そしてこの成功には、音楽そのものの魅力に加え、誰しものが扱うことのできる「音楽を解釈する手段」の存在が不可欠であったことは論をまたないだろう。ベートーヴェンの音楽＝斬新さだけではイノベーションは生まれなかった。新しいものに対して多くの人々が理解でき、熱中できるような仕掛けが、イノベーション創造の鍵となるのかもしれない。(須貝 悠也)